

# 伝統的な『大日経』研究とは何か

— 本宗における『大日経』講伝開筵に向けて —

山本隆信

はじめに

真言宗の教えを伝承するにあたり、講義・講伝・傳授という形式がある。教相は講義、事相は傳授、事相・教相にわたるものを講伝という。講義は誰でも受けることができるが、傳授と講伝は入壇済みの者（伝法灌頂経験者）のみ受けることができる。<sup>①</sup> 古来より『大日経』の学修は、『大日経疏』に基づき、経のみを教授することはない。以下に図示するように『大日経疏』の『大日経口疏』（住心品）部分を講ずることは講義と位置づけられ、『大日経奥疏』（具縁品）以降）を講ずることは講伝といわれる（もしくは傳授ともされるがこの問題に関しては後述したい）。

講義（教相）	講伝（事相）	講伝（教相・事相）
『大日経口疏』	『大日経奥疏』	『大日経疏』（『大日経口疏』 + 『大日経奥疏』）

伝統的な『大日経』研究とは、『大日経疏』を体系的に理解することであり、それは事教二相にわたる講伝によつて相承されてきたといえる。だが本宗では金剛宥性（一八九五）が明治十五年（一八八二）に『大日経奥疏』講伝を開筵して以来、すでに『大日経』講伝が行なわれなくなっている。また真言宗各派連合として密門宥範（一九二〇）が大正元年（一九一二）に京都事相講伝所で開筵した『大日経奥疏』講伝には、御室・土宜法龍（一九二九）、智山・伊藤宗盛（一九四四）の他、長谷宝秀（一九六九）、梅尾祥雲（一九五三）、高井観海（一九五三）等一百余名の名だたる龍象が列席し、往時の隆盛が偲ばれるが、それからすでに一世紀以上の年月が経過している。こうした年月が過ぎ去ってしまった理由は、事教二相に通達した良師を得るのが困難であるがためであろうが、そもそも伝統教学なるものが近現代以降の学制成立によつて廃れてしまったことで、講伝を授ける任に堪える大阿闍梨が出なくなつてしまつたのが大きな要因であろう。

『大日経奥疏』講伝はおろか、『大日経口疏』講義でさえも現在では体系的に学ぶ機会が失われている。伝統教学の最後の継承者といわれる那須政隆（一九八七）は『大日経疏』の講義を行なうことの困難さを「大学の単位制度に起因する欠陥」と難じている。所依の経論の学習が宗門から忘れ去られていく危機感から、昭和四五年（一九七〇）十月に別院真福寺において『大日経口疏』講義を行ない、ついで昭和四八年（一九七三）十月に那須親下が『金剛頂経』講伝を行なっているが、その当時でさえ、すでに『大日経口疏』講義の実施が困難であつたのであるから、『大日経奥疏』にわたる講伝の実施はさらに危殆に瀕しており、現在では不可能とさえいえる状況にある。

本稿では、『大日経』講伝（すなわち『大日経疏』全巻にわたる総合的な講伝）に関して、その相承にあつて必要とされる前提について考察し、さらに現代において講伝の実施が困難であれば、時代に即した講伝のあり

方はどうあるべきかについて提言してみたい。

『大日経疏』注釈書著述の伝統

『大日経疏』注釈書として最も古いとされるのは、大師口実慧記『遮那経王疏伝』八卷<sup>(4)</sup>である。実慧に次いで古いのが観賢<sup>(八五三)</sup>『大日経疏鈔』四卷であり、この書から頼瑜は加持身教主説を引証したことは有名である。『大日経疏』は真言宗所依の経論であるから、弘法大師空海の頃より研鑽が重ねられていたと思われる。しかし、『大日経疏』を体系的に教授する伝統は古来より確立されていたとは言いがたい。杲宝<sup>(三三〇六)</sup>の『東宝記』は東寺の旧記に関して仏・法・僧の三編に分けて記した史料であるが、その「法宝」の篇で、伝法・結縁灌頂、御影供、安居講、諸堂法会（年中行事）、講説、安置聖教等の様々な法務条項を列挙する。そのなか、講説の「伝法会」の条において、『大日経』、『金剛頂経』、『蘇悉地経』、『菩提心論』等の宗学は「未だ講演有ることなし」と言及しており、諸寺院がそれぞれ独自に伝法の料をまかなってきたことを述べている<sup>(6)</sup>。宥快<sup>(一三四五)</sup>も『大日経疏伝授鈔』において、「大師已来、之れを伝受し來たる事は勿論なり。然りと雖も、形<sup>かた</sup>の如く之れを伝えて、広く流布すること無し<sup>(7)</sup>」と述べている。

ここで杲宝も宥快も『大日経疏』を体系的な形として講伝し流布することを「講説」、「講演」、「伝受（伝授）」と記しており、必ずしも後世のように「講伝」と表記していない<sup>(8)</sup>。貝谷師の研究にあるように「講伝」という語の表記が使用されるようになったのは「おそらく明治の終わりから大正期にかけてのこと<sup>(9)</sup>」である。そしておそらく「講伝」という形式が一般化したのは、江戸期に『大日経』講伝で一世を風靡した浄嚴<sup>(一七〇三)</sup>以降かと思われ<sup>(10)</sup>。本論文では特に断らないかぎり『大日経疏』の講義・講演・伝授とは実質「講伝」を意味するものと

して、『大日経』・『大日経口疏』・『大日経奥疏』の相承をすべて広義の「講伝」としておきたい。たとえ『大日経口疏』のみの講義であれ、密教の相承を念頭において、しかるべき莊嚴と設え（洒水・道場観・血脈・印可等）を伴えば、それは講伝としてさしつかえないからである。<sup>11)</sup>

いずれにせよ、杲宝や宥快が主張するところは、古来より基本的な密教聖典を学修する機会はそれぞれの寺院の裁量に任せられ、それを型通りに伝えることが当時まで行なわれていなかったということである。『大日経』・『大日経疏』を型通りに伝えるということは、具体的には広く流通し一般に通用する『大日経疏』注釈書のスタンダードを制定し、それに依拠して講義・伝授・講伝といった諸形式によって相承していくことを意味する。まずその前提作業として、そうした標準・規矩を作る必要があつて、後述するようにテキストの文献学的な作業（本文・解釈の表記法や「爛脱」とよばれる誤植の訂正法）が講伝の主目的となる。杲宝も宥快も共に東寺学派・南山学派を代表する学匠として『大日経疏』注釈書を著述することに心血を注いだ希代の学匠である。そして彼ら以後、『大日経疏』注釈書を著述することが各派の学匠たちの裁量に任せられ、それぞれが作成した注釈書をもとにして『大日経疏』の教授を行なったものと思われる。<sup>12)</sup> そうした『大日経疏』注釈書を著述する伝統（これを『大日経疏』教学としておきたい）は、すでに実慧や観賢の頃からあるが、歴史的に確かな体系的資料として現れるのは、済暹（一〇二五）『大日経住心品疏私記』一六卷（大正蔵五八・二二二五番）をもって嚆矢とする。しかしこれは『大日経口疏』の注釈であり、しかも完本ではなく第一巻を欠き、必ずしも済暹の『大日経疏』教学が真言宗内ですっかりと根づいていたとは言いがたく、平安期においては『大日経疏』教学ははまだ整備されていなかったようである。

実に歴史的に確固とした文献として現れ、完本として現に流伝している『大日経疏』注釈書は、頼瑜（二六

〇四三 『大日経疏指心鈔』十六卷（大正蔵五九・二二二七番）である。先述の東寺の昶宝や高野の宥快は頼瑜よりも後世の学者であつて、南北朝期に下つてからもなお『大日経疏』の伝授・講演は一般に流布していなかつた状況下で、新義派の頼瑜が『大日経口疏』注釈書を著しており、東寺学派も高野学派もそれに追隨するようにして、それぞれの『大日経疏』教学を形成樹立している。この点からも、『大日経疏』注釈書を著述する伝統が形成され、本格的に『大日経疏』教学が体系化されていったのは、おそらく古義・新義の区別が明確化してから後のことと言えるのではないか。<sup>13</sup>

鎌倉期における真言宗の教義学上の問題点として重要視されたのは、いわゆる本体論と教主論であつた。この論について而二説と不二説とが立てられ、法性（高野八傑の一人、<sup>二四五</sup>）の学系を而二門説、道範（高野八傑の一人、<sup>二七八</sup>）を不二門説とする。これら金剛峰寺方の教学熱の高まりに伴い、伝法院方には頼瑜が出て不二説を主として加持身説を提唱した。以降の真言宗の教義学は、『大日経』の教主論をめぐる議論を中心として発展し、宗祖弘法大師の見解（宗家）と善無畏『大日経疏』の見解（疏家）との見解を対蹠的に把握させながら展開していく。そしてその流れが以後の真言教学において、古義・新義の思想的分水嶺を形成していき、教学的対立、さらには政治的な騷擾をも惹き起こしていった。

とりわけ『大日経疏』教学において『大日経口疏』が重視されるのは、論義の算題が「住心品疏」に集中して説かれることに大きな理由がある。頼瑜の『大日経疏指心鈔』も毎年の伝法会にあたって行なわれた講義をまとめたものである。『大日経口疏』講義とは別に、そもそも真言宗内で『大日経奥疏』講伝がいかにして別立てされたかのように行なわれ、いつの時代から始まったのか定かではないが、おそらく鎌倉期頃から行なわれていたもの<sup>14</sup>のようである。『大日経奥疏』注釈書の嚆矢は、高野八傑の信日『大日経疏勘文』（二十卷）、及び信堅『大日経

疏問書』(二三八卷)であるが、おそらくこの頃から各学派の学匠たちは自製の『大日経奥疏』注釈書に基づきつづ講伝を行なっていたようである。たとえば鎌倉時代の自性上人我宝(二三三九)は横尾山西明寺の学匠であるが、各地に招かれて公開講伝(『秘藏記』)を行なっている。<sup>15)</sup>『大日経疏』教学は、この我宝の所伝をもとに、弟子の頼宝(二三三〇)が『大疏勘註』を作成し、それを杲宝・賢宝(二三三八)が補筆し、『大日経疏演奥鈔』五六卷(大正蔵五九・二二一六番)となつて結実した。<sup>16)</sup>これが『大日経奥疏』注釈書中で最も権威ある書となる。<sup>17)</sup>『大日経疏演奥鈔』は杲宝撰述とされるが、杲宝一人の手に成つたわけではなく、我宝の伝を受けた頼宝の注釈を基盤として、杲宝が延文元年(一三五六)七月十八日に起稿して、賢宝が応永五年(一三九八)五月五日に稿了するに至るまで四十二年の星霜を費やした東寺三宝(頼宝・杲宝・賢宝)の集大成なのである。

しかし、この書でさえも『大日経疏』二十卷中、第三卷「具縁品」から第十七卷之余「持明禁戒品第十五」までの注釈であり、「阿闍梨真実智品第十六」以下「囑累品第三十一」までの十六品を注釈するには至っていない。『大日経奥疏』全体にわたつた体系的な理解がいかに困難であるかがわかる。『大日経疏演奥鈔』以降の『大日経奥疏』注釈書として主なるものを挙げてみても、『大日経口疏』注釈書にくらべて圧倒的に少ないことがわかる。『大日経疏義述』三十卷(『真言宗全書』三・四卷所収)、『大日経疏妙印鈔』八十卷(大正蔵五八卷所収)、『大日経疏演奥鈔』六十卷(版本五六卷、大正蔵五九卷所収)は公刊されているが、その他の多くは写本として残る稀覯書である。以下のようなものである。

## 『大日経奥疏』の注釈書類

著者 (生存年代) 著書

成立

信日 (一三〇七?)

『大日経疏勘文』三十卷

不明

信堅	(二二五九)	『大日経疏問書』三八卷	一二八八年
	(二二五二)		
宥祥	(?)	『大日経疏義述』三十卷	一三二二年 <sup>(18)</sup>
	(一三七)		
宥範	(一三七〇)	『大日経疏妙印鈔』八十卷	一三〇八年—一三三〇年
	(一三五二)		
杲宝	(一三〇六)	『大日経疏演奥鈔』六十卷	一三五六年
	(一三六二)		
宥快	(一三四五)	『大日経疏传授鈔』十八卷	一四一四年
	(一四一六)		
亮元	(一七三六)	『大日経疏蒿測鈔』六五卷 <sup>(19)</sup>	一六九七年
	(一七〇六)		
曇寂	(一七四二)	『大日経疏私記』八五卷 <sup>(20)</sup>	一七三一年
	(一七四二)		
隆瑜	(一七五〇)	『大日経疏拾要記』五二卷 <sup>(21)</sup>	一八四一年
	(一七五〇)		

右記はいずれも入手困難であるとともに、あまりに浩瀚すぎ、通覧するのも困難であって、『大日経疏』教学を体系的に理解するには大きな壁が立ちはだかっている。『大日経奥疏』注釈書類はそれぞれの時代に輩出された学匠によって著されたものであり、それらは後述するように相承系譜があるにはあるのだが、実際のところは学匠独自の意匠に任されていると言ってよい。『大日経疏』教学がいかに相承され、注釈書がどのような影響関係にあるか、またその注釈書をもとにして型通りに講伝されたのかどうか、その記録がはっきりと残っていないのでよくわからないが、後述するように講伝には作法があり、およそ十日をワンクールとして何期かに分けて講じていったものと思われる。そのことは写本の欄外注記等に講伝の日数が記されることによってうかがうことができる。講伝を行なうにあたり、その注釈書を下敷きとして『大日経』講伝が実施されたかどうか、そうした写本情報によって知ることができ、なかには講伝が行なわれた形跡を残す写本も存在するが、詳細はさらなる研究を俟たねばならない。

## 『大日経』講伝の相承系譜

宥快『大日経疏伝授鈔』によれば、『大日経』講伝（伝授）を始めたのは鎌倉期の学僧宥祥（一三三七）<sup>？</sup>とされ、そもそもその淵源は安祥寺流にあるとされる。次のようである。——「此の人（宥祥）『大日経疏』を鑽仰して世に流布す。都鄙『疏』の伝授、多分は此の上人の下より之れを伝う。疏相伝の濫觴を尋ねれば、小野安祥寺の流より出でたり。」<sup>(23)</sup>——宥祥は、伊豆走湯山遍照院に住して、妙浄上人と呼ばれ、道号を不二、金剛号は清浄金剛という。延暦寺・金剛峯寺にも住して、天台・真言宗を兼学した。安祥寺流は宗意（一〇七四）<sup>（一〇七八）</sup>——実厳（一一八五）——実円<sup>じつえん</sup>——理海・全考——宥祥と相伝し、宥祥は関東各地で『大日経』講伝を行なった。その風聞が京都にも伝わり、東寺の学頭頼室が後宇多法王（大覚寺殿一二六七）<sup>（一三三四）</sup>の院宣を請いて永仁二年（一二九四）に宥祥を京都に招聘して『大日経』講伝が開筵された。その院宣（勅定）は次のようである。——「世に絶して久しき『大日経疏』相承の由、其の聞こえ有り。尤も神妙なり。抄物を認めて本所の御経蔵に納めらるべし<sup>云々</sup>」<sup>(24)</sup>——この招聘に応じて、このときの講伝をもとに『大日経疏義述』（『浄不二鈔』三十卷）が著された。おそらく当時は「世に絶して久しき」と言われるほどに、高野も東寺も『大日経』講伝を行ない得る学匠がいなかったことが想像される。その後も宥祥は、永仁五年（一二九七）六月に下野国衣寺で、正安元年（一二九九）に武蔵国廣田寺で、正安二年（一三〇〇）に伊豆走湯山で、嘉元三年（一三〇六）に鎌倉理智光寺で講伝を開筵したことが伝えられている。

宥祥は各地で講伝を行なったので多くの弟子があり「伊豆方<sup>(25)</sup>」という法流を形成したとされるが、その相承の本流は、写瓶の荣智上人宥禪を介して宥快に相伝した。宥快は高野山宝性院門主となり、安祥寺流の正嫡となっ

た南山教学の大成者である。高野山の事教二相の法流は、多く宥快に拠る。『大日経疏』の相承も安祥寺流に発して、宥快に至り、さらにその系譜は江戸期に及んで新安祥寺流を樹てた浄厳（江戸靈雲寺開基一七〇二）へと伝わった。浄厳の門下の慧曦（江戸靈雲寺第三世一六七九）が著した『大疏伝授私記』には、中性院流と安祥寺流の二系統の『大日経』講伝の相承系譜を伝える。<sup>26</sup> 以下のようなのである。

中院流の相承系譜の一例（慧曦はこの他に四つの系譜を伝える）

明算—良禅—兼賢—理賢—覺基—観心—慧深—信日—玄海—快成—信弘—宥快  
安祥寺流の伝は次のようである。

範俊—嚴覚—宗意—実厳—実円—理海・全考—妙浄（宥祥）—源暹—宥範—良宥—宥麴—宥快  
さらに宥快から浄厳に至る血脈は、中院流・安祥寺流とも次のように伝える。

宥快—成雄—快尊—良雄—什遍—嚴雅—快旻—宥智—朝意—道意—良意—浄厳

宥快以後、『大日経』講伝を世に流布した最大の貢献者は浄厳とその弟子の慧光（江戸靈雲寺第二世一六六六）であると言つてよい。近代の大阿闍梨である密門宥範（一九〇三）は浄厳を次のように評する。——「奥ノ疏」<sup>27</sup>

伝授に於いては、浄厳師の功尤も大なり。故に古来の講伝、皆な師の御手入本を用い、許可も亦た安流に依る」

——このように『大日経』講伝の相承系譜は大きくは宥祥から宥快、そして浄厳へと伝わり、「近來、『奥ノ疏』講伝は浄厳和尚を以て本とす」とされる。

智山書庫に所蔵される『大日経』講伝に関する資料中にも、浄厳の『大日経』講伝の記録が存する。智山の学匠もまた浄厳およびその弟子の慧光から講伝を受けており、その記録の奥書から、講伝が開催された年次・席等がわかる。江戸期以降の『大日経』講伝の資料について、管見であるが、以下のようなのである。

元禄十三年（一七〇〇）浄厳『大日経奥疏口伝浄厳和上伝授』靈雲寺、七八席<sup>(28)</sup>

元禄十四年（一七〇一）浄厳『大日経持明禁戒品中六月成就秘訣』靈雲寺<sup>(29)</sup>

享保五年（一七二〇）慧光『第三之大事伝授聞書』二月十七日から享保六年五月十四日、二〇八席<sup>(30)</sup>

元文二年（一七三七）曇寂『大日経疏私記』四月十日から六月十一日、六〇座<sup>(31)</sup>

宝曆十年（一七六〇）弘道『大日経疏伝燈記』『大日経口疏』講義<sup>(32)</sup>

明和六年（一七六九）大阿浄空（智山第二十世<sup>(16)</sup>・浄光（智山第二十六世<sup>(17)</sup>）記『大日経奥疏聴

要記』二月十六日から七月七日<sup>(34)</sup>

明和八年（一七七二）浄空『大日経口疏』講義、六月十二日から九月九日<sup>(35)</sup>

寛政三年（一七九二）動潮『大日経奥疏聞書』<sup>(36)</sup>

天保三年（一八三二）海応『大日経奥疏分科』一二二一会<sup>(37)</sup>

安政五年（一八五八）『大日経住心小品疏講筵録』三五席<sup>(38)</sup>

こうした記録類を参照するかぎり、浄厳以降、智山においても『大日経』講伝の相承が細々とであるが行なわれてきていることがうかがえる。さらに調査を進めていくことで、江戸期における『大日経』講伝の実態がわかるであろう。多くの資料が今後の研究課題として残されている。

### 『大日経奥疏』講伝の作法と内容

次に『大日経』講伝を実施するに際しての具体的な諸問題を見ておきたい。一つには講伝において相承される口伝の内容、さらに講伝に要する日数、そして講伝の設え等を順次考察していきたい。

① 口伝について

『大日経奥疏』講伝における伝授の仕方・作法について、十二種の名目をたてる。これを「十二口伝」という。<sup>(39)</sup>伊豆方相伝と高野方相伝とで異なるとされ、宥快が両伝を和会したとされる。こうした講伝の作法・様式は、そもそも宥範『大日経疏妙印鈔』と杲宝『大日経疏演奥鈔』において頻出するから、宥快以前から行なわれてきたものであろう。宥快『大日経疏伝授鈔』には「十二口伝は妙浄上人製作の『玄記抄』の奥に之れを載す」とある。十二とは以下のようなものである。

- (1) 未会…未再治。「いまだあつめず」と訓ずる。未校訂の部分の意。『大日経』が漢訳された際に「住心品」、「具縁品」、「世間成就品」、「悉地出現品」の四品を校訂し終えた段階で『大日経疏』の注釈が開始され、その後「大日経」全文を校訂したとされる。『大日経疏』の大部分が未校訂のまま一行禪師が没し、その後「智儼・温古が『大日経義釈』を校訂した。

(2) 治定…再治。校訂済みの部分の意。

(3) 惣牒…一段の経文をすべて記す（牒する）ことをいう。

(4) 別牒…経文の一文・一句を個別に記すことをいう。

(5) 引牒…注釈を提示した後に経文を引証することをいう。

(6) 校牒…経文と注釈中に引用される経文とを校合して見るとをいう。

(7) 取意…経文の意を取って注釈することをいう。

(8) 語略…経文を省略して提示すること。前半の句を略することを前略、後半の句を略することを後略という。

(9) 爛脱…錯乱離脱の意で、慢法の者が理解できないように、あえて経文の意味を混乱させて通じにくくさせ、

師より伝授を受けなければ文意を理解できなくなるとされる。

- (10) 廻文：経文の順序が前後すること。上の文を下に廻したり、下の文を上を廻したりすること。
- (11) 向上：注釈をしてから経文を引くこと。
- (12) 向下：経文を引いてから注釈すること。

これら「十二口伝」は、秘密の奥義を伝授するという意味での「口伝」というよりは、『大日経疏』における『大日経』本文の引用法、注釈の表記法、いわゆる誤植と言ってもよい「爛脱」の訂正法といった統語法（シNTAX）を示したものに他ならない。『大日経疏』を正確に読解するための文献考証がすなわち口伝なのである。応永二五年（一四一八）に著された『大日経奥疏由来』という書には、「此の『疏』を読み伝うる事をば、十二口伝を以て之れを習うなり。若し口伝無くば、経文と梵語漢語誤り易しなり」と伝えて（41）いる。こうした文献学が『大日経』および『大日経疏』の読解において重視される理由は、善無畏・一行が漢訳の際に依用した梵本に起因する問題、さらに『大日経疏』の校訂が不十分であったこと、天台宗が『大日経義釈』に依拠していること等の、テキストの基本的性格に由来する諸問題から派生してきており、現在においてもなおその文献学的作業は完遂していない。とりわけ「十二口伝」中で問題とされるのは、「爛脱」の処理であって、「経疏伝授相承の深旨は爛脱を以て至要とすべき」とされ、種々の相伝があるとされるが、それらを「小事」、「傍伝」としてあまり重視しない立場もある。（43）

「十二口伝」は単なる文献学上の形式であるが、教理学上の口伝については、宥範『大日経疏妙印抄口伝』十巻中に一二三の項目を挙げて『大日経』の教理に関する諸口伝が記されている。（44）その口伝は『大日経』全体にわたる教義内容に踏み込んだもので非常に興味深いが、著者の宥範は宥祥に受学した僧でありながら、宥祥の相承本

流の宥快によって宥範の口伝は「殆ど戯論の事」と貶められ、あまり重用されない。<sup>45</sup>

しかし重用されないとはいえ、各字匠ともその旨とするところに基づいて意匠をこらしているはずであり、その教義内容の検討はなされなければならないが、それはまた今後の課題である。<sup>46</sup> いずれにせよ、真言宗においては口伝を最秘至極とするが、『大日経疏』における「口伝の大事」の実態とは、「文字読みの伝授計り」<sup>47</sup>の客観的な考証学にすぎず、真に重要なのは胎藏・伝法灌頂の印明であることが古来より強調される。<sup>48</sup>

② 講伝に要する日数について

『大日経』講伝に要する期間として、およそ十日をワンクールとすることが習いである。それは『大日経疏』注釈書類に記される日数の表記が十日毎に刻まれていることよってわかる。こうした伝統がいつから行なわれてきたか定かではないが、古来より『大日経疏』の伝授は、五十日、百日の期間をかけて行なわれていたようである。『大日経奥疏由来』という書によると、『大日経疏』を五十日、百日に伝授するのは「此の事必ずしも其の掟無し」として、智証大師円珍（八八—九一）<sup>49</sup>が五三日かけて伝授したこと、小嶋の真興（一〇〇—〇四）<sup>50</sup>が四十日かけて伝授したことを挙げ、年月にこだわらず伝授すべきとしている。

ちなみに筆者は松長有慶猊下の『大日経』講伝に参画した。この講伝は高野山大学伝統教学復興プロジェクトとして二〇一二年から二〇一四年の間、六会（十二日）にわたってそこで依用されたテキスト（高野山の版本複写を使用）は、宥快『大日経疏鈔』（八五卷）と浄嚴『大日経住心品疏冠解玄談』（九卷）である。これはどちらも『大日経口疏』の注釈であり、『大日経奥疏』についてはまったく触れないが、この『大日経口疏』注釈書二種をもって高野山の伝統的な講伝に際して使用するテキストとした点は非常に意義深い。今回の講伝では計十二日をかけて行なわれたが、実際にこのテキストに依用して講伝を行なった場合、それに要する日数は各々九十日

(計一八〇日)を要する。

宥快『大日経疏鈔』(八五卷)を講伝する際に要する日数は、大正藏经所収本に日数が記載されているように、第一会(本末)、第二会(本末)、第三会の計五会開筵し、本末はそれぞれ上下あり、日数は十日をワンクールとして計九十日をもって全巻を終了することがわかる。すなわち巻数をもって示せば、(1)巻第一から巻第十まで(第一本・上半)、(2)巻第十一から巻第二十(第一本・下半)、(3)巻第二十一から巻第三十(第一末・上半)、(4)巻第三十一から巻第四十(第一末・下半)、(5)巻第四十一から巻第五十(第二本・上半)、(6)巻第五十一から巻第五十五(第二本・下半)、(7)巻第五十六から巻第六十五(第二末・上半)、(8)巻第六十六から巻第七十五(第二末・下半)、(9)巻第七十六から巻第八十五(第三)をそれぞれ十日かけて行なうのである。

浄厳『大日経住心品疏冠解玄談』に記載された講伝に要する日数も宥快『大日経疏鈔』と同様に九十日である。第一会(本・末)、第二会(本・末)、第三会の計五会開筵し、本末はそれぞれ上下に分ち、計九期で二期十日をワンクールとして計九十日をもって終了する。すなわち巻数をもって示せば、(1)玄談(一日)から始まり第一巻まで(第一本・上半)、続いて(2)第二・三巻余(第一本・下半)、(3)第三巻余・四巻余(第一末・上半)、(4)第四巻余・五巻余(第一末・下半)、(5)第五巻余(第二本・上半)、(6)第六巻(第二本・下半)、(7)第七巻・第七巻余(第二末・上半)、(8)第七巻余(第二末・下半)、(9)第八巻(第三)をそれぞれ十日かけて行なうのである。

近代以前の『大日経』講伝が実際に何十日もかけて行なわれたものかどうか定かではないが、この一事を取り上げて、現代において『大日経』講伝を如法に開筵することが極めて困難であり、ほとんど不可能であることがわかるであろう。現代の趨勢に即した『大日経』講伝の新しいあり方を真剣に考慮していかななくてはならない段階にわれわれは直面しているといえる。

③ 講伝に要する設えについて

『大日経』講伝に要する支具や設えについて、明確に記した書をいまだ見ない。ここでは今回、筆者が受けた高野山大学における松長有慶殿下の『大日経』講伝における設えを中心に考察したい。大法の伝授には法衣着用のうえ、灌頂に即した儀礼が必要となるのが通例であるが、今回の講伝では法衣は黒衣・如法衣着用であった。儀礼は、おそらく洒水加持をもって替えたものと思われる。また古来より『大日経』講伝に際して印可や聖教類を授受したことが説かれるが、その内容については、いっさい明確ではない。いわゆる伝授には「血脈・印信・紹ノ文」の三点セットがあるはずだが、それらをどのように授受するのか、あるいは本当に授受したのかどうかも不明である。ちなみに今回の『大日経』講伝には、そうした血脈等の授与はなかった。すでに述べたように、宥快が『大日経疏』に関する口伝・印可・秘事秘曲の授受を戒めており、高野山では宥快が重用されるからそうした相承を行なわなかったのであろうかとも推測される<sup>(2)</sup>。

講伝に要した文献資料は、松長有慶著『大日経住心品講讀』（大法輪閣、二〇一〇）を前提として、すでに述べたように伝統的なテキストとして宥快『大日経疏鈔』（八五卷）と浄厳『大日経住心品疏冠解玄談』（九卷）の版本が簡易製本（計九冊）によって配布された。講伝に際して各山で依用すべき聖教は異なるであろうから、もしも本宗で講伝を開筵する場合は、基本書の選定を行なううえで、受者に配本する必要があるであろう。当然、『大日経』と『大日経疏』のテキストを所持しておくことが前提となるであろうが、今回の講伝にあたって改めてそれを所持しておくようには高野山から要請されなかった。古来より『大日経』講伝には「十二口伝」をもとに正確な訓点により読み下すことがなされてきたが、そうした伝授作法はテキストのデータ化とデスクパブリッシングが主流の現代の趨勢に鑑みて、あまり重要ではないであろう。

また松長猊下は小田慈舟（一八九〇）から講伝を受けており、血脈相承も当然あるはずだが、その系譜は示されなかった。しかし宥快の頃から『大日経』講伝に際して『大日経』・『大日経疏』の大事とは胎藏の伝授であり、胎藏の伝授は伝法灌頂の印明であるとされるから、あえて『大日経』講伝の相承系譜を示す必要はないとも考えられる。

古来より『大日経』講伝における口伝・印可・大事・秘訣の類いは伝法灌頂胎藏の印明をもってそれに代えてきたといえる。宥快『大日経疏伝授鈔』には次のように見える。——「高野の習いには別して疏の大事なんと云う名目之れ無し。『大日経』は胎藏の説所なり。胎藏の印可を受くる人之れを伝授す。胎藏の印明に付いて淺深重重は之れ有るべし。『疏』は『大日経』を積す。別に疏の大事と云いて、胎の印可の外に何ぞ之れ有らんや。」——つまり、胎藏灌頂の秘印明が『大日経』の大事なのであって、それとは別に『大日経』および『大日経疏』の秘伝があるわけではない。宥快は、さらに続けて『大日経疏』に関して大事秘事を新造することを「僻事」と戒めている。

### 今後の『大日経』講伝のあり方

『大日経』講伝の実態は、時代ごとに嫡々相承されてきており、安祥寺流を主流とする宥快の所伝が正統とされているが、それ以前・以後のいずれの学匠も自らが作成した『大日経疏』注釈書を参考書として講伝を行なっている点から、相伝の実態は各時代に輩出された学僧たちの意匠に任されてきたと言える。近代以降『大日経』講伝は、本宗において長らく開筵されていないが、講伝に要する本来的な条件を検討すれば、『大日経疏』注釈書類の膨大な資料の読解といい、講伝に要する日数といい、如法に『大日経』講伝を開筵することは極めて困難な

状況である。新しい形の伝統継承のシステムを構築していく必要があるといえる。

また講伝の担い手の問題がある。講伝を行ない得る大阿闍梨の資質も当然問われるであろう。伝統教学の重要性を誰もが理解していながら、「伝統的な宗乗学を継承している方は、高野山を含めて現在皆無であるといわなければならぬ」<sup>54</sup>のが教学の現状なのである。また伝統的な訓詁註釈を旨とする宗乗学は、現代人の教養水準に照らして難解にすぎ、教化の最前線に立つ教師の実状・要望にもそぐわないように思える。新時代に向けた、新しい形の講伝が求められているのではないだろうか。

一度絶えてしまった相承を復活させることは難しく、すでに那須政隆猊下の時代において『大日経』講伝は行なわれ得ず『大日経口疏』講義でさえも聴講する機会がないのが実状であった。こうした状況を憂慮して宗務庁主催の下に昭和四五年（一九七〇）十月、別院真福寺で『大日経口疏』講義（『大日経住心口公開講座』）が開講された。この講義がどのような設えで行なわれたのか、また公開講座であるから受講者に一般人が含まれていたのかどうか、詳らかではない。その講義録を繙くと、かなり専門的な内容を含んだ「智山伝統の学風」<sup>55</sup>を伝えるものとなっている。一日四時間の講義を十日間にわたって行なったが、予定どおり完全に講了することができなかったために、後日印刷に付して受講者に頒与することを約束して講習を終えたという。そしてその講義録として出版されたのが『大日経口疏講義』（真言宗智山派宗務庁、一九七三）である。

もし智山で『大日経』講伝が開筵されるとすれば、依用すべきテキストは頼瑜『大日経疏指心鈔』十六卷（大正蔵五九・二二一七番）であることは言える。講伝に際しては、高野山ではあまり重視されなかったところの、本地身・加持身の教義学をふまえた議論がなされるべきであろう。頼瑜『大日経疏指心鈔』は『大日経口疏』注釈書であって、『口疏』だけでは講義であって、講伝とはなり得ないという意見もあるかもしれない。しかし、高野

山における講伝の所依のテキストも宥快・浄嚴の『大日経口疏』注釈書であった。そして、実際の講伝においても『大日経口疏』部分の解説をもって終了している。『大日経口疏』だけでも、その設えを整え、所依のテキストを示すことよって立派な『大日経』講伝となり得るのである。そもそもすでに述べたとおり、『大日経』講伝における大事とは、口決や秘伝ではなくて、『大日経』の大事であり、それは伝法灌頂の胎藏の印明であるとするのが古来の習いである。『大日経奥疏』にこだわらず、実際の法会で重視される行儀に即した教学を学習する方が有益であろう。智山の行儀においては論義が重視されるが、論義の理解を深めるためには『大日経口疏』の体系的理解が必須である。やはり真に大事なのは「住心品」なのである。これは宥快『大日経疏伝授抄』にも説かれ、「住心品」こそが「肝心」なのである。<sup>56</sup> 智山で行なわれている論義の算題と密接に関連させながら、『大日経口疏』を総合的に理解する学処、そうした場こそが、智山にふさわしい新しい『大日経』講伝のかたちとなるはずである。

古来『大日経』講伝では、阿闍梨自身が作成した注釈書を手引きとして講伝がなされてきたことを繹述したが、松長猥下も自著『大日経住心品講讚』を参考書として講伝を行なっていた。近年智山では、福田亮成『現代語訳『大日経住心品疏』を読む 密教とは何か』（ノンブル社、二〇一五）が出版された。これは福田亮成先生が『高尾山報』誌上で平成十五年（二〇〇三）から平成二十四年（二〇一二）にわたって一〇五回に及んだ『大日経疏』の解説をまとめたものである。この書は、『大日経疏』の本文を書き下し文で示し、その解説を行ない、現代語訳を付した、現在『大日経疏』読解において最適の参考書である。智山において那須政隆猥下の薫陶を受け、『大日経疏』注釈書の著述をもち、もつとも講伝を行なうに足る学僧は福田亮成先生において他にいない。

那須政隆猥下の『大日経口疏講義』は宗務当局主催によるものであった。現在、宗派には大正大学・智山専修

学院の他、研究所内の智山伝法院開設講座・教区主催講習会等さまざまな学処があるが、体系的な講伝を教授する場は存在しない。伝統教学の復興、または現実的な学修内容の策定をし、修学の場を提供する必要がある。那須猥下は『大日経口疏講義』のはしがきで「若き学徒がこれを踏台とし、これを持ち越えて、より勝れた研究成果をもたらすべく、不断の精進を続けられんことを、只管に念願するものである」と表明しておられる。すでに那須猥下の『大日経口疏』講義が開筵されてから半世紀がすぎようとしている。事態は急務であると言わねばならない。宗派を挙げて『大日経』講伝開筵に向けた教育施策に取り組んでいくべきであろう。

註

註における引用は適宜現行通用の字体に改めた。

(1) 「具縁品」以降の教授は已灌頂者のみに限るといふ説は、『大日経疏』巻第三に「所以に真言を修学せん者をば、要す先づ漫荼羅に入らしむるなり」(大正蔵三九・六〇九下)とあるように、古来より言われている。拙論「伝統的な『大日経』研究とは何か」『現代密教』第二五号、二〇一四、一〇一頁、註一四参照。宥快の弟子である快全(一四二四)の主張によれば、未来結縁の者のために読むことはその限りではないとされる。以下のようにある。「問う。此の『疏』を伝授するに異なる秘事秘曲有るや。答う。此の『疏』を伝授する当山の様は然らず。入壇以後は弟子の所望に随つて読み伝うべし。或いは丁を越し、或いは文段を引く等の

異なる子細之れ無し。但し、伝法を受けず、許可ばかりには伝授すべからざる事なり。然りと雖も、阿闍梨の意樂に随つて、平等大悲の心に住し、未来結縁の為に是れを読む事、制の限に非ず」快全口説永遍記『大日経奥疏由来』(長谷宝秀・梅尾祥雲編『大疏秘記集』『長谷宝秀全集』第三卷、法蔵館、一九九七)二二二頁。また釈榮秋『経疏相伝手鑑』(『大疏秘記集』二二六頁に「未だ印可を蒙らざる人に経疏を授与せざる証文」と「機の深淺に随い授与せしめる意得の証文」として『大日経疏』から次の二ヶ所を引証する。

①『大日経疏』「具縁品」巻第三「所以然者。佛説此經要從師受不得輒爾修行。若無明師。則所傳無寄故也。然以解二種義故。得阿闍梨名。所謂淺略深奧分。若觀前人。未有深解之機。則順常途隨文爲釋。若已成就利根智慧。則當演

暢深密而教授之。」大正蔵三九・六一一―下

②『大日経疏』『秘密八印品』卷第十七「若弟子之位未得許可等。固不在言限。何可妄説。令他輕謗。自招無間大獄之罪耶。」大正蔵三九・七五一下

- (2) また慶応元年（一八六五）五月七日から九月十六日にかけて道応（一八〇六）を大阿として『大日経』講伝五七席が開筵された。明治三年（一八九九）二月二十五日から五月二十九日にかけて密門宥範（一八四三）を大阿として六五席が開筵された。明治四年（一九〇八）九月三日から翌年三月九日にかけて密門宥範を大阿として五五席が開筵された。長谷宝秀『大日経奥疏講伝玄談聞書』（『大疏秘記集』）四一―四一二頁

- (3) 「かつて大正大学に在任中『大日経口疏』を講じたことがあったが、週一回の講義ではいかに努力してみても一年間に全体の三分の程度しか進まなかった。したがって学生にとつて残りの三分の二は一生涯聴講の機会もなく終わってしまう状態であった。それは大学の単位制度に起因する欠陥であると考えられるが、いずれにしても、昔小柄などが学んだ当時のように、必要課目全体にわたつて完全に講了することはほとんど望めない実状にある」那須政隆『大日経口疏講義』（『那須政隆著作集』第六卷、法蔵館、一九九七）二〇九頁

- (4) 『大疏秘記集』所収  
 (5) 『大疏秘記集』には『遮那経王疏伝』をはじめ、入手困難

な三八部四六卷の『大日経疏』注釈書を挙げている。

- (6) 「真言宗僧五十人を東寺に住せしむる、其の宗学は、一に大毘盧遮那・金剛頂等の経、并に蘇悉地律・菩提心論に依つて修学せしむる者なり。此の事有ると雖も、未だ講演有ることなし。諸寺皆供家を置き、儲て田園を買い、常に講演を行なう。此れに准じて件の物を以て、伝法の料と為す」『東宝記』（『続々群書類従』卷第十二）第六、一二二頁。  
 また引き続き「或る記に云く、承和十三年、実惠僧都『大日経疏』を講ず。聴衆等真雅を上首として十余人なりと云々」（同書一二三頁）ともある。

- (7) 『大日経疏伝授鈔』（『大疏秘記集』）七〇頁  
 (8) 講伝の類語の考察は、貝谷隆慧「講伝の意義とその濫觴」『現代密教』第二六号、二〇一五、六四―六五頁ですでに検討されている。講伝の類語としては講讀、講肆、講授、伝講という表記がある。宥範『大日経疏妙印抄』『講讀』大正蔵五八・六三八中、杲宝『大日経疏演奥鈔』『講肆』大正蔵五九・一中、曇寂『大日経疏住心品疏私記』『講授』大正蔵六〇・七一七註一、動潮『大日経奥疏聞書』『伝講』『智山書庫所蔵目錄』第二卷、真言宗智山派宗務庁、一九九五、七七頁

- (9) 貝谷隆慧、前掲論文、六七頁  
 (10) 「江戸期までの伝授録・聞書類を通観するに、講伝に関わるものは、伝授の中に収められ、また伝授の語をその題名に用い、更には本文中に「伝授する」と表現され、これら

(11) この点に関しては高野山大学の伝統教学復興プロジェクトにおける松長有慶殿下の『大日経』講伝は、『大日経口疏』のみの解説であり、血脈・印信などはなかったが、伝統的な祖師の典籍が配布され、法衣着用のうえ高野山を道場として行なわれた「講伝」であった。講伝において問われるべきは、『大日経』、『大日経疏』の歴史的な相承を念頭においているかどうか、ということであると考える。この点は最後に繰り返し述べたい。

(12) 学匠たちの裁量によつて『大日経疏』を教授することが行なわれていたということは、たとえば頼諭が『大日経疏指心鈔』というスタンダードを作成してからも、頼諭の弟子であり学頭を継いだ頼豪が『大日経疏開雲抄』十六巻を作成している。その述作理由は『東草集』巻第五によれば次のとおりである。——「然りと雖も、聖言甚深にして初心は解し難く、神筆幽玄にして浅智は迷い易し。今、難字を注して訓読滞り無く、深義を会して解了<sup>とどろ</sup>、抛<sup>とどろ</sup>有り。既に大乘の弘通を扶く、何ぞ少分の利益無からん。茲れに因つて、且く住心品の疏に就いて聊か十六巻の抄を綴る。名づけて『大日経疏開雲抄』と曰う。庶わくは初心の学者、雲

を開いて日輪を見るが如く、霧を褰<sup>か</sup>げて月宮を望むに似たらん。」——すなわち頼豪は、初学者のために自ら難字を注して訓読し、自身作成の注釈書を作成して、それをもとに弟子に『大日経疏』を教授しているのである。なお『大日経疏開雲抄』は写本が智山書庫に所蔵される。頼豪が、師の頼諭の説を含めて、どのように他の注釈書を参照しているかを見ることで、頼諭以後の直近の新義教学の相承がいかになされてきたかわかるはずであるが、そうした興味深い問題も今後の課題である。

(13) もちろんそれぞれの学派は、互いの教学を参照しつつ成立しているので、その思想上の貸借関係と先後関係を明確にすることにより、各学派の主張がより明確化される。頼諭によつて『大日経疏』教学が始まったというのではなく、歴史的に体系化したオーソリティを最初に樹立したのは新義派の頼諭が一番早いということの意義を、ここでは強調したい。

(14) 「藤原鎌倉期には主として口疏即ち住心品疏の講義を為し、奥疏即ち具縁品以下の講伝は余り行なわれなかった。此時代は事相分派時代で外観からは事相隆盛期と見られるのであるが、案外事相の根柢を為す奥疏の研究などは忽になつていたようである。殊に鎌倉末期には奥疏の講伝を行ない得る人は東寺高野にも殆どなかったようである。」『真言宗全書』「大日経疏義述」解題、八頁。また那須猗下も次のように言う。「公開講伝がいつの時代に始まったか確かな

ことはわからないが、頼瑜僧正（一三二六）の前後の頃から、誰が最初ということもなく、時勢的に公開講伝されるようになったものようである。」那須政隆『理趣経達意』（那須政隆著作集）第六卷、法蔵館、一九九七）五頁

(15) 延慶二年（一三〇九、我宝七十一歳）七月十一日から八月二十九日に至る四十八日間、鎌倉佐々目谷において頼乘、性春、性印、成秀、政印、頼宝、頼神、静恰、我覚の九人を聴衆として『秘蔵記』を講述した。応長二年（一三二二、我宝七十四歳）二月二十一日から二十七日に至る七日間、東寺西院と鎮守八幡宮において、『般若心経秘鍵』を講した。正和三年（一三二四、我宝七十六歳）、大覚寺仙洞御所において『秘蔵記』を講説した。

(16) 「有名な大日経疏演奥鈔もその源我宝上人より出づるものがあるとも伝えらる」『真言宗全書』「解題 著者略伝 我宝」の項、三三三頁

(17) 「本書は普通臬宝撰と称するも実には臬宝一人の手に成つたものではない。臬宝が先師頼宝の勘註に基きて、自己の見解を加え（卷三十四の終までか、臬宝の資賢宝が更にこれを継承して筆削添補したものである。（中略）本書の起源をなせる頼宝の勘註は横尾の自性上人我宝の伝を本として記し、他師の説をも載せ、又私見を加えて大疏卷五より卷十七に至る文を釈したものと称せられ、別に大疏卷三、四の具縁品の問書もあると云う。全巻の数は不明であるが、東寺観智院賢賀の随見雜記には、大疏卷十一から十六まで

の勘註首尾十八卷あり、賢宝が応永四年正月から九月までに良秀、頼玄等の助力を得て書写したとあるから、大部のものであったらしい」（小田慈舟『仏書解説大辞典』「演奥抄」の項）。

(18) 『大日経疏義述』（『浄不二鈔』）は元亨二年（一三二二）に記された自序があるが、後述するようにその成立はそれよりかなり早いものと思われる。ちなみに永祿六年（一五六三）に著された円宥『真言宗三部経并大日経疏因縁事』（『大疏秘記集』二四三頁）には「嘉元徳治の頃か」とする。嘉元徳治年間は一三〇三年—一三〇七年。

(19) 亮元『大日経疏蒿測鈔』六五卷は、長谷寺に原本があり高野山大学図書館にその伝本が存するとされ、一説には八十余巻とされる。長谷宝秀『大日経奥疏講伝玄談問書』（『大疏秘記集』四一〇頁

(20) 曇寂『大日経疏私記』八五卷は、「二十卷の疏と十四卷の義釈とを対校しつつその釈義甚だ詳細を極め最後の囑累品迄を通釈して本疏の註釈としては尤も卓越した好著とされている」（『仏書解説大辞典』）。『大疏秘記集』四一〇頁には「高野山宝亀院に六十四卷有り」とも記す。曇寂『大日経疏私記』八五卷のうち、『大日経口疏』部分の二十卷は大正藏経にも所収され、その写本が智山書庫に存する。大正藏所収本の『大日経疏私記』二十卷には日数が記されていないが、写本の欄外注記には、本末と日数が記され、この曇寂『大日経疏私記』をもとに曇寂もしくはいづれの大阿

かが『大日経』講伝を行なっていた形跡がみられる。この書の問題点についてはいずれまた他稿を期したい。『大日経奥疏』部分の六五巻は智山書庫に所蔵されていたが、現在信じ難いことに所在不明であり、智山が誇る貴重資料であるだけにその捜索が待たれる。『智山書庫所蔵目録』前掲書、八〇頁によれば、その外題は「大日経私記」とある。

書誌情報は以下のとおりである。「写 映入 六十五冊（不揃）245×175 27—12 全八十五巻八十五冊のうち一—二十巻欠（丁数）二十一巻—68丁、二十二巻—58丁、二十三巻—63丁、二十四巻—65丁、二十五巻—64丁、二十六巻—84丁、二十七巻—69丁、二十八巻—67丁、二十九巻—68丁、三十巻—50丁、三十一巻—58丁、三十二巻—70丁、三十三巻—43丁、三十四巻—60丁、三十五巻—70丁、三十六巻—65丁、三十七巻—57丁、三十八巻—67丁、三十九巻—61丁、四十巻—53丁、四十一巻—71丁、四十二巻—74丁、四十三巻—73丁、四十四巻—72丁、四十五巻—73丁、四十六巻—72丁、四十七巻—65丁、四十八巻—65丁、四十九巻—65丁、五十巻—53丁、五十一巻—67丁、五十二巻—75丁、五十三巻—75丁、五十四巻—69丁、五十五巻—63丁、五十六巻—76丁、五十七巻—75丁、五十八巻—69丁、五十九巻—65丁、六十巻—71丁、六十一巻—71丁、六十二巻—58丁、六十三巻—65丁、六十四巻—64丁、六十五巻—69丁、六十六巻—62丁、六十七巻—61丁、六十八巻—60丁、六十九巻—50丁、七十巻—62丁、七十一巻—66丁、七十二巻—77丁、七十三

巻—63丁、七十四巻—64丁、七十五巻—59丁、七十六巻—58丁、七十七巻—50丁、七十八巻—47丁、七十九巻—42丁、八十巻—45丁、八十一巻—69丁、八十二巻—55丁、八十三巻—45丁、八十四巻—53丁、八十五巻—56丁

（奥—三十五巻）于時享保十一年龍次丙午秋八月朔於洛西五智山蓮花寺閣筆沙門クニノ同十六年辛亥初秋初六日再閱了 元文三年歲宿戊午夏六月二十有七日重校了」

(21) 智山第三十三世・隆瑜は『大日経疏拾要記』（五二巻）を著すに際して曇寂の『大日経疏私記』（八五巻）を全模写したとされる。隆瑜の著作群「拾要記」中もつとも大部にして、まさしく心血を注いだ『大日経奥疏』注釈書である。智山書庫にのみ所蔵され、端本扱いとなつて「五十二巻五十二冊のうち十七—五十二巻三十六冊のみあり」（『智山書庫所蔵目録』前掲書、八六頁）とされる。未確認であるが、おそらく隆瑜が文化十二年（一八一五）から天保四年（一八三三）にかけて著した『大日経疏第三拾要記』（十七冊不揃）とされる写本文献がその端本欠落部分と思われる。江戸期の『大日経』講伝に関する各種の資料には、奥書に伝授が行なわれた日数・期間や席次が記されている。

(23) 宥快『大日経疏伝授鈔』（『大疏秘記集』七一頁。後世においても妙浄上人宥祥が講伝の先駆者であるとされる。「妙浄上人を魁と為し、尤もと為す」行証『毘盧遮那経疏伝授綱領』（『大疏秘記集』二五四頁

(24) 宥祥が上洛して講伝を開延し、勅定を蒙つたという伝えは

- 人口に膾炙し、宥快『大日経疏伝授鈔』（『大疏秘記集』）七二頁、同文が慧曦『大疏伝授私記』（『大疏秘記集』）一八三頁にも見える。また永遍『大日経奥疏由来』（『大疏秘記集』）二二二頁、印融<sup>一四三五</sup>『奥疏<sup>二</sup>付状』（『大疏秘記集』）二二五頁、釈栄秋『大日経奥疏伝授血脉相承』（『大疏秘記集』）二三四頁、円宥『真言宗三部経并大日経疏因縁事』（『大疏秘記集』）二四三頁、長谷宝秀『大日経奥疏講伝玄談聞書』（『大疏秘記集』）四一八頁
- (25) 伊豆方の法流は、範俊から宥祥を経由して宥快に至る相伝をいう。快全口説永遍記『大日経奥疏由来』（『大疏秘記集』）二二三頁参照。また高野方、伊豆方、醍醐方、讃岐方、京方とある。長谷宝秀『大日経奥疏講伝玄談聞書』（『大疏秘記集』）四二二頁
- (26) 慧曦『大疏伝授私記』（『大疏秘記集』）一八一―一八八頁
- (27) 長谷宝秀『大日経奥疏講伝玄談聞書』（『大疏秘記集』）四一―一頁
- (28) 『智山書庫所蔵目録』前掲書、七八頁
- (29) 前掲書、八一頁
- (30) 慧光『第三之大事伝授聞書』（『大疏秘記集』）三九六頁
- (31) 『智山書庫所蔵目録』前掲書、八五頁
- (32) 前掲書、九〇頁
- (33) 浄光『大日経奥疏聴要記』（『大疏秘記集』）三〇〇―三三四頁
- (34) 『智山書庫所蔵目録』前掲書、七八頁
- (35) 『密教大辞典』「浄空」の項
- (36) 『智山書庫所蔵目録』前掲書、七七頁
- (37) 前掲書、七八頁
- (38) 前掲書、八二頁
- (39) 印融『大疏詮要抄』（『大疏秘記集』）一二二頁
- (40) 宥快『大日経疏伝授鈔』（『大疏秘記集』）八三頁
- (41) 快全口説永遍記『大日経奥疏由来』（『大疏秘記集』）二二一―一頁
- (42) 釈栄秋『経疏相伝手鑑』（『大疏秘記集』）二六六頁。『経疏相伝手鑑』では爛脱を至要とすべき証文として『大日経疏』から次の二ヶ所を引証する。
- ① 『大日経疏』「具縁品」卷第五「所以如此互文者。此是如來密藏。爲防諸慢法人不從師。受者。變亂經文。故須口傳相付也。」大正蔵三九・六三三下
- ② 『大日経疏』「成就悉地品」卷第十二「此經聖者所祕。故不明白次第説也。」大正蔵三九・七〇六下
- (43) 亮元『爛脱辨』（『大疏秘記集』）二八二頁参照。亮元<sup>三六〇六</sup>は『大日経疏蒿測鈔』六五卷の著者であり、東密新義派の学匠である。
- (44) 宥範『大日経疏妙印抄口伝』十卷、元徳三年（一一三三）大正蔵五八・二二一―四番。その末尾に「皮分五七肉八十骨二髓十及料同<sup>料簡十卷</sup>都合一百三十七 大日経王已体全」（大正蔵五八・六八四上）とある。
- (45) 宥快『大日経疏伝授鈔』（『大疏秘記集』）八〇―八一頁。「宥

鑊法印の疏の抄物口訣大事等の事」として、宥範（宥鑊とも表記）を「彼の法印元とより教相等の事は未練の仁」と批判し、宥範の口伝を「妙浄上人（宥祥）の口伝等の中にも更に無き事等、自由に之れを書き集めて秘訣と称して之れを授く」として「仍って信用し難し」と断じている。またこうした宥快の見解は江戸時代の新安祥寺流においても同様で、慧巖『大疏伝授私記』（『大疏秘記集』一八五頁）には「猶云く。鑊（宥範）の伝多く私意を加う」と難じている。

(46) 大鹿真央「中世東密教学における教判論の展開」『現代密教』第二五号、二〇一四では、『大日経』三劫段に関して、寛鑊・静遍・道範・宥範といった学匠の教判論の展開を究明している。また講伝の内容に関して、小林靖典「『大日経』の講伝について―我々は何を伝えていくべきか―」『現代密教』第二六号、二〇一五では、講伝の内容について概観し、古義派は本地身説、新義派は加持身説を基調とした講伝が行なわれるべきことが主張される。

(47) 「只、た疏の大事といつば胎藏の大事なり。胎藏の大事といつば、両部灌頂の大事なり。此の外に大事無しと意得るなり。仍ってただ文字読みの伝授計りなり」積栄秋『大日経疏縁起』（『大疏秘記集』二二二頁。ほぼ同文が円宥『真言宗三部経并大日経疏因縁事』（『大疏秘記集』二四二頁、宥快口快全記）<sup>伊豆方私記</sup>、奥疏大事之記』（『大疏秘記集』三七二頁、長谷宝秀『大日経奥疏講伝玄談聞書』（『大疏秘記集』

四二三頁にも見える。

(48) 『大日経』の大事とは、胎藏・伝法灌頂の印明であり、その他に別に秘事・秘曲・大事・肝要をたてるべきではないとされる。「先ず当山には胎藏灌頂の印明の本説と意得るまでなり。別に胎藏灌頂の印明の外に、経疏の大事之れ無き故に相伝の様各別なり<sup>云々</sup>」宥快『大日経疏伝授鈔』（『大疏秘記集』八四頁。「秘事秘曲の一段に於いては、信日相承の様は、大日経疏の大事と云うは所釈の経の大事なるべし。所釈経の大事といつば、胎藏の大事なり。胎藏の大事とは伝法灌頂の印明なり。然れば別に大事を意得べからず。」

快全口説永遍記『大日経奥疏由来』（『大疏秘記集』二二二頁）  
 (49) ちなみに『大日経疏』を五十三日かけて伝授する次第について、積栄秋『経疏相伝手鑑』（『大疏秘記集』二七一―二七四頁にも説かれる。

(50) 快全口説永遍記『大日経奥疏由来』（『大疏秘記集』二二二頁。また長谷宝秀『大日経奥疏講伝玄談聞書』（『大疏秘記集』四二二頁に「伝授日限の事」として講伝に要する日数について論じられている。

(51) 初会（二〇一二年七月四・五日）、第二会（二〇一二年十二月五・六日）、第三会（二〇一三年六月十七・十八日）、第四会（二〇一三年十二月九・十日）、第五会（二〇一四年六月十九・二十日）、第六会（二〇一四年十二月八・九日）と開筵された。

- (52) 宥快が『大日經疏』の口伝について、宥範の口伝・大事・秘訣を戯論であると批判したことは先註に示したが、口伝・大事が存在しないと云っているのではない。伝授には初重(普通の伝授)・二重(随分の伝授)・三重(付法写瓶の伝授)の三様があり、三重の伝授において「更問等の一々の口伝、後問答の印明の説処等、本地法身教主の義、衆生本有の心体を經の宗旨と習う事、是の如きの口伝」が授けられるのが、写瓶の伝授であるとされる。宥快『大日經疏伝授鈔』(『大疏秘記集』)一〇一頁
- (53) 『大日經疏伝授鈔』(『大疏秘記集』) 八四頁
- (54) 福田亮成「解説」『那須政隆著作集』第六卷、法藏館、一九九七、四二七頁
- (55) 「この講義は固より未熟なもので慚愧に堪えないが、わが智山伝統の学風を伝えたいと希って、敢えて提供したものを諒とせられたい」那須政隆『大日經口疏講義』智山派宗務庁、一九七三、一頁
- (56) 妙浄上人宥祥が願行上人に受法したとき、宥祥が『大日經』三十一品中のいずれを肝心とすべきですかと問うたとき、願行が伝えたこととして「住心品」「具緣品」の両品なり」と答え、さらにその両品でどちらが肝心であるかという問いに対して願行が「住心品」なり」と答えて宥祥が感銘したことを伝える。『大日經疏伝授鈔』(『大疏秘記集』) 九一頁。この文は慧巖『大疏伝授私記』(『大疏秘記集』) 一九七頁にも引用され、ゆえに初心者にはまず「住心品」を講じてから後に「具緣品」以下を伝授することが有益であるとしている。
- (57) 那須政隆、前掲書、一―二頁
- (キーワード)
- 『大日經』『大日經疏』『大日經口疏』『大日經奥疏』  
講義 講伝 伝授